

ものがたり
慈濟

ツーチー 2018年4月 256



表見返し●

文・證嚴法師/訳・濟運/撮影・涂鳳美

生命を善用して 慧命を成就させる

人生は時間と共に短くなり、

体の機能は衰えます。

しかし、時間を無駄にせず、

初心で以て良能を發揮し、

生命を善用すれば、慧命は成長します。





2月6日に発生した花蓮地震で、慈済は同月7日から13日までに延べ2757人のボランティアを避難所でのケア活動、家庭訪問、及び現場での救災活動に動員した。建物が傾いた雲門翠堤ビルでの救助活動を見守っていたボランティアは、寒さと悲しみを耐え忍んで、運び出された犠牲者のために念仏を唱えた。(撮影・蕭耀華)

目次

【社論】

天地間の最大のエネルギー

慈願／訳 4

【主題報道】

花蓮大地震

惟明／訳 8

恐るべき震災

青木芳味／訳 14

慈済の寄り添い支援

惟明／訳 36

精舎の尼僧

本諦／訳 40

永遠に慈済人を支える後ろ盾

【特別報道】

大愛テレビ局開局二十年

心嫻／訳 48

【慈善国際】

世界最大規模NGO「BRAC」
ブアズレCEOに単独インタビュー

性和／訳 60

【慈済国際】

僕がパパの目になるんだ

慈願／訳 68

【衲履足跡】

無明を打ち破る

済運／訳 72

【執着心を捨てる愛】

無言の良師―宥安

葉美娥／訳 78

【證嚴法師のお諭し】

大愛と善行、福を世界に

慈願／訳 84

【法の香りに浸る】

一つの灯が千年の暗闇を取り払う

山田智美／訳 96

【慈済台湾】

銀髪の宝を抱きしめる(上)

本諦／訳 100

慈済大事記【三月】

済運／訳 107

天地間の最大エネルギー

寒い二月六日の深夜、花蓮が震度七クラスの強震に襲われ、青山緑水を望む四棟のビルが倒壊した。台湾各地から捜索隊が駆けつけ、地元病院や慈善団体、各地からの善意の人たちによる綿密な支援のネットワークによって、被災者の人命救助から心身のケアサポートまで迅速に行

われた。

激しい揺れによって、頑丈に見えた建物が傾き、物が粉々になった。人の命がいかに脆弱なものであるか、この大自然の警告によって知ることができる。多くの住民は家を失い、地震の恐怖の中、これからのことを心配している。山と海に囲まれた風光明媚な花蓮が塵に覆われたその夜、多くの人が傷ついた。

余震が続く中、捜索隊員は身の危険も顧ず、不眠不休で瓦礫の中から生命の痕跡を探し求めた。長年慈善救済活動に携わってきた慈済も、ただちに支援センターを立ち上げ、静思精舎の尼僧たちは徹夜で生姜汁とお粥を焚き、ボランティアが防寒用の毛布と共に被災現場に届けた。ついで臨時避難所で簡易ベッドを組み立てて被災者に提供し、必要な物を買うための慰問金を配付した。

ボランティアの中には、自らも被災して、家が重大な被害を受けていた

のに支援活動を優先した者もいた。彼は薄い部屋着のまま飛び出した隣近所の人たちを見て、頑張って彼らを助けなくてはいけないと思った。ボランティアは深夜も第一線で活躍する救難の英雄たちのために炊き出しをして、激励した。北部、南部の慈済人は救済物資を送り、数百人のボランティアが被災地周辺の住民を個別訪問した。

二十年前の台湾中部大地震から、昨年マグニチュード七・一のメキシコ大震災に至るまで、慈済には国内外の地震災害支援の経験が蓄積されている。被災者の苦境を我が身のことに感じたと感じたボランティアは、被災者の立場に立って彼らのニーズを理解すると共に、「この世のすべての人は家族」とおっしゃった證嚴法師のお言葉をひしひしと感じた。

今、慈済の心の故郷、花蓮で災害が起きた。静思精舎の尼僧やボランティアは総動員で、愛を以て現地の被災者に寄り添っている。温かい人情を

倍に感じたのは、慈済が過去に支援したメキシコやトルコ、ヨルダン、日本など十数カ国から、お見舞いと祝福のメッセージが届いたことだった。法師は人々の愛のエネルギーに感謝すると共に賞賛し、それは名実共に「大愛で衆生に寄り添う」ことだと言った。

予測によると、今年には気候変動と地殻変動が激しい一年になる。年の初めに私たちはその試練を乗り越えた。絶え間ない愛の集結によって、人々の不安は薄れると共に、より多くの善縁がもたらされるであろう。この世に豊かな大愛が流れ、この世の最も大きなエネルギーになることを願う。

（慈済月刊六一六期より）

旧正月の前日、2月6日深夜、花蓮でマグニチュード6・4の強い地震が発生。大きく傾いた商校街の雲門翠堤ビル。



花蓮大地震

ユーラシアプレートとフィリピン海プレートとの境目に位置する花蓮の住民は日頃から地震に慣れている。だが、二〇一八年旧正月の前日。深夜に起きた地震が花蓮の人々の考えを根底から覆した。そして台湾人の愛の力を揺り動かした。

◎文・黄秀花 撮影・蕭耀華 訳・惟明



雲門翠堤ビルは45度に傾き、救助隊員やビルの中に閉じ込められている人々の安全が憂慮された。救助活動期間中は倒壊防止のために11本の太い鋼鉄の柱で建物を支えた。



●七星潭大橋は、観光名所の七星潭ビーチへの車の流れを分散するために2013年10月に開通した。米蒂断層沿いに位置しているために、今回の地震で路面に亀裂と隆起が生じ、開通から5年足らずで通行不能になった。

恐るべき震災

◎文・黄秀花 撮影・蕭耀華 訳・青木芳味



●国盛六街に立つ2棟のビル「白金双星」とその斜め向かいの「吾居吾宿」が地震で倒壊。潰れた車の上に飛び降り、大急ぎで逃げ出す住民の姿もあった。

地震に慣れているはずの花蓮人も、「今度の揺れは本当に恐ろしかった」と驚愕させた大地震だった。

二月六日午後十一時五十分、人々が静かな眠りにつこうとしていたそのとき、八十六秒にもおよぶ上下左右の激しい揺



● 統帥飯店の正面と後方で、地元花蓮や各地から駆けつけた救助隊が丹念に生存者の捜索を行う。

れが襲った。室内の物が落ちて床を埋め
 尽くし、泣き叫ぶ声があちらこちらで響
 き渡った。市街地に位置する中央路の消
 防隊員がすぐさま出動し、警察官の警笛
 が絶えず鳴り響いた。花蓮慈濟病院へと
 急ぐ救急車が一台また一台とけたたまし
 い音を立てながら通り過ぎて行く……。
 市街地でのビルの倒壊を受けて、各病
 院で災害時医療救護体制が発動され、医
 療スタッフたちが次々と救急治療室へ駆
 けつけた。花蓮慈濟病院の医師は、救急
 車で運び込まれた患者が危篤状態である
 のを見ると、すかさず動いているベッド
 に飛び乗りCPRを施した。「OHCA」

(Out of hospital cardiac arrest、院
 外心停止)を叫ぶ声に緊張感が走る。わ
 ずか二時間のうちに百人以上の人々が救
 急治療室に押し寄せ、医療スタッフらは
 傷の消毒や薬の塗布、包帯巻きや縫合な
 どの治療に追われた。
 人々は二月四日の夜九時過ぎに起きた
 マグニチュード六・一の地震を本震であ
 ると思いついていた。しかしその二日
 後に、さらに大きなマグニチュード六・
 二六強の地震が起こり、花蓮市街地で
 は震度七の非常に強い揺れを観測した。
 人々の記憶の中には、当時の天地がひっ
 くり返ったかのような情景と、泣き叫び



●捜索活動は時間との戦い。軍隊は疲労困憊しながらも救助に取り組み、家族らは救急車の横で吉報を期待しながら、今か今かと待ち続ける。

ながら逃げまどう人々の様子が今も鮮明に焼きついている……。

花蓮市街地では強震により四棟のビルが倒壊したが、中でも被害が大きかったのは雲門翠堤ビル、国盛六街のマンション白金双星と吾居吾宿、そして一階部分が地下に埋まってしまった四十一年の歴史を持つ老舗ホテル統帥飯店だった。

安息の夜を襲った強震

「揺れていたあの一分間は、まるで宇宙の浮遊物のように、あらゆる電気製品までが揺れによって飛び上がりました。

暗闇の中で、私の頭にテレビがぶつかり、頭を手で触ってみるとしつとりと濡れていました。血が出ていたのです」。こう語るのは、商校街の雲門翠堤ビルに住んでいた陳建香さんだ。彼は初め、ビルが倒れたことに気づかなかったという。真っ暗な中を、唯一光を発する携帯電話を握りしめ、裏手のベランダへと移動して脱出した。ドアは大きな家具でふさがれており、どこからそんな力が湧いて出たのか分からないが、とにかく力を振りしぼって隙間を作り、潜り抜けることに成功したのだ。

彼は六階に住んでいたが、ドアを開け

ると地面が間近に迫っており、一階ほどの高さしかなかった。そこへ四人の救助隊がはしごを持ってきて、彼が下に下りてこられるようにした。両足が地に着いたとたん、一気に力が抜けて動けなくなった。「大げさでもなんでもなく、私はまるで死んだ豚のようになり、四人に担がれて現場を離れたのです」

六十六歳の陳建香さんは苦境を脱した後、まるで木で作った鶏のようにぼうっとしながら道を歩いていった。雨が降り始め、いつそう冷え込んできたが、気にも留めずにただひたすら朝まで歩き続けた。早朝の六時過ぎに、体を震わせてい

る陳さんに気づいた一人の男性が毛布をかけてくれた。警察官もやってきて、被災者だと確認し、中華小学校に一時避難することになった。彼は見舞いに来る友人たちに慰めの声をかけられるたびに、「私は閻魔大王と戦った。そして勝ったんだ！」と答えるという。そうすることによって自分を励まし、心を慰めているのかもしれない。

雨降りすさぶ中

雲門翠堤ビルの正面に立つと、その四十五度に傾いた建物の姿から地震の猛

威が伝わってくる。数本の太く頑丈な鉄骨でビルを一時的に支え、さらなる倒壊を防ぎながら、救助隊が低層階の住民とビル表側二階部分の漂亮生活旅店の宿泊客の救出を試みる。

台湾各地から駆けつけたレスキュー隊たちが危険を冒して救助活動を行い、時間と戦い続けた。震災の翌朝まで生存者が救出されていたが、午後になると悲しい知らせが相次いで飛び込んできた。遺体が搬出されるごとに雨の勢いも増し、慈済ボランティアの読経の声も相まっ

●台湾各地から駆けつけた救助隊が救助犬や重機を駆使して生存者の捜索を続けた。





激しい大雨にも見舞われ、救助隊も軍隊も警察も、記者も各慈善団体のボランティアたちも皆全身ずぶ濡れになり、頭のとっぺんから足のつま先まで冷え切って、寒さに打ち震えていた。

そんな時とても嬉しかったのは、慈善団体によって提供された生姜汁だ。飲むと一気に体が温まった。慈済ボランティアはあまり遠くない所に救助隊が一息つくための天恵堂休憩所を設置し、彼らに温まってもらおうと大急ぎでエコ毛布を用意した。そして皆に毛布を一枚ずつ渡し、温かい生姜汁をお椀一杯ずつ飲んでもらい、力を蓄えてもらった。夕方近く

●避難所となった花蓮県立体育館では、各慈善団体によって食糧や物資が提供された。しかし、何の仕切りもないためプライバシーは確保されず、落ち着いて眠ることは難しかった。

て、物寂しく悲しい雰囲気は辺りを包み込んでいった。

建物の中からたびたび起こる焦げ臭いにおいに、度重なる余震。消防車から長いサイレンが鳴り響き、「屋内にいるスタッフは全員ただちに避難してください！」という大音量のアナウンスが流れると、現場の人々は思わず息を呑み、二次災害発生への恐怖に怯えた。

美崙溪のすぐそばの土手の上は、温度が低く凍えるように寒い。それに加えて

になると、ボランティアたちはさらにシングルバーナーを持ってきて、暖を取り、何とか寒さをしのいだ。

一分一秒が辛い

老舗ホテル統帥飯店の倒壊現場では、旅行者らは無事に救出されたが、二人の従業員が建物の下に閉じ込められたままになっていた。捜索中、レスキュー隊が壁を叩くと、彼らも壁を叩き返してきたので、居場所を把握することができ、人々は心躍らせていた。しかし、午後二時四十六分、先に救出された従業員、周



●中華小学校の避難者は、そのほとんどが家があったも帰れない人や帰る家を失った人たちだった。慈濟は避難者たちがゆとりと休むことができるよう、大急ぎで福慧ベッドと布団を運び込み、提供した。

志軒さんの体には白い布がかぶされていた。現場で十四時間待ち続けた周志軒さんの母親の洪冬春さんは冷たくなった息

子に駆け寄り、胸が張り裂けるような苦しみに襲われた。

地震発生後、洪冬春さんは車を飛ばして統帥飯店へと向かい、夜中の十二時半から翌日午後まで待ち続けた。降り続く雨とともに気温が次第に下がり、周志軒

さんが救急車で運ばれた後は大雨になった。まるで神様がここで起きている一部始終を見ていて、涙を流しているかのようだった。

周志軒さんが発見されてから間もなく、もう一人の従業員、二十六歳の梁書璋さんがレスキュー隊によって救出された。彼は幸運にも無事で、自分で歩いて出てきたのだが、検査のため花蓮慈濟病院に搬送された。

地震発生時、四本の柱が一気に崩れ、ガラスのドアは砕け散り、天井が落ちてきて、梁書璋さんは柱の横に倒れた。閉じ込められていた十五時間の間、彼は体

かり！」という声が聞こえたとき、彼は自分がもうすぐ助かるのだと確信した。引っぱり出されたその瞬間に思ったことは、「生きているって素晴らしい！これからは家族にも恋人にももっと優しくしよう」ということだった。父親も彼を励まして言った。「天がお前を生き延びさせたからには、きつとなすべき任務があるのだ。これからはもっと福田を耕しながら生きていくんだぞ」

被害に驚く

夜が更けるにつれ、被災者のために県

で瓦礫を支えながら周りの様子を探った。大の字になって寝るだけの空間しかないが、左右に少し移動することができると。真つ暗な中で、彼は試しに呼んでみた。「周志軒さん！」。すると、弱々しい返事と何かを叩く音がかすかに聞こえた。しかし幾度かの余震の後、相手の返事も音も一切聞こえなくなった。

車の音や呼びかける声が聞こえてきて、彼は声のする方向へと這って行った。また、レスキュー隊に正確な位置を知らせるため、しきりに天井を叩き、返事をしながら進んで行った。そして人の声がだんだんはつきりしてきて、「しっ

が用意した避難所である中華小学校と県立体育館も次第に人が増えてきた。

この二つの避難所は、いずれも二、三百人の避難者を収容することができると。慈濟は彼らがゆつくりと休むことができるよう、福慧ベッドを家族ごとに配り、ほかにも多くの心優しい人々が服や布団や日用品などを提供した。また、三度の食事は慈濟や一貫道とその他の団体が提供した。

住む場所や食べるものには困らなかつたが、衝撃を受けた心はなかなか安まるものではない。二歳半の女の子を抱いた杜さんという女性は、国民八街に住んで



●200人を超す被災者が花蓮県立体育館で一週間避難していた。その間に、慈濟ボランティアは毎日食事とおやつ、飲み物などを用意し、体育館に届けた。

いた。地震が起きると手近なものをさつといくつか持ち出し、夜通し逃げ回ってようやく避難所に入ったが、ショックを受けた娘さんはなかなか寝つけず、ずっと「ママ、逃げよう、逃げよう！」と叫び続けていたという。

夜中から明け方にかけて、たびたび震度四〜五の余震があり、そのたびにこちらの携帯電話から警報が鳴り響い

た。そのためさらに緊張感が高まり、母も娘も落ち着いて眠ることができず、眠ったり目を覚ましたりの繰り返しだった。

国民八街は封鎖され、昼間一時的に開放されたときだけ住民は物を取りに家に帰ることができた。杜さんは三階にある自宅に戻ると、床のタイルが破損し、タンスも家具も倒れてめちゃくちゃになっているのを目の当たりにした。そして震

災の夜、倒れた物を懸命に起こしながらやつとのことを通る道を確保し、娘と二人で逃げ出したことを思い出したという。ここまで話すと彼女は、涙をこらえきれなくなつて泣き始めた。

杜さんはシングルマザーで、娘さんは早産だったため発達障害があり、今でも療育を受けている。彼女は涙を拭くと覚悟したようにこう語った。「私も娘も無事だったのだから、これ以上の幸せはありません」。彼女は台北に住むお姉さんの家へ行つて一緒に旧正月を過ごし、その後帰つてきて家を整理する予定だという。

街地に移り住み、部屋を借りて一人暮らしをしていた。住んでいた部屋は国盛五街の雲門翠堤ビルと倒壊した二棟のビル吾居吾宿と白金双星からわずか一本の裏通りを隔てた距離にある。あの晩、彼女も恐ろしい揺れを体験した。

「激しい揺れの後、棚が倒れて、玄関のドアも変形し、右手と膝を怪我しました」。伝さんは四階のバストイレつきの部屋に住んでおり、何かあった時も近くに頼れる人はおらず、思い起こすだけでも恐ろしくなるという。現在パソコンの職業訓練校に通っている彼女は、「今回も本当に強いショックを受けました。花

地震のことを語るだけでも恐ろしい

花蓮はフィリピン海プレートとユーラシアプレートの交わる位置にあり、たびたび地震が発生する。そのため花蓮の人々は皆地震に慣れっこになっており、地震の時は逃げる必要などないと自慢げに語る人もいたが、今回ばかりは違っていた。ほぼすべての人が恐怖に怯えた表情を浮かべ、心底からショックを受けていたのだ。

代々花蓮南部の玉里鎮に暮らす女性、伝さんは、故郷と親元を離れて花蓮の市

蓮に十数年も住んでいた私たちのプログラミングの先生でさえ、怖くなって台北へ引っ越したくらいです」と語る。

彼女は、隣の建物が今にも倒れそうになっており、その二階から飛び降りて逃げる人や、ビルの前にある壊れた自動車の上に飛び降りてから急いで滑り降りる人たちを目の当たりにした。そして雨除けのある場所に大勢が集まって、一睡もせずに一晩中皆で議論を交わし合った。幸いなことに住民は皆すばやく避難し、死傷者は一人も出なかったという。

三十代の彼女は、一匹のマルチーズを連れて慈濟静思堂の裏手にある世界慈濟



謝している。

各界から駆けつけた救援隊

軍人の蔡哲文さんは災害時医療救護隊のライセンスを持っている。彼は地震後まず妻と三人の子供たちを県立体育館に避難させると、すぐに震災現場の雲門翠堤ビルへ向かい、負傷者を救急車で病院に運んで治療を受けさせたり、遺体を葬儀場に運んで安置したりする手伝いをした。

彼の妻は看護師で、夫の行動を支持しており、「彼は人を助けに行きましたの

●旧正月前は気温が低い上にじめじめした雨の日が続き、救助隊員たちはいっそうの苦勞を強いられた。慈濟ボランティアは彼らにエコ毛布を送り温まってもらった。

人寮に移った。ここは震災後、被災者たちの避難所として開放されていた。伝さんは慈濟がペット連れでも受け入れてくれることや、一族に一部屋ずつ割り当ててくれるので、お互いのプライベートも守られること、しかも食事が三食提供されるうえに慈濟病院の精神医療科専門スタッフが常駐しており、心理カウンセリングも受けることができるなど、ケアが非常に行き届いていることにとっても感

で、私は家庭のために尽くします」と話す。吉安郷北昌村のマンションに住んでいたが、家中のあらゆるものが床に落ちて散乱し、水道管が破裂した。そのうえ、生後三か月になったばかりの娘を含む三人の子供を一人で世話しなければならなかったが、妻は全力で夫の熱意をサポートした。

花蓮には彼のような熱意ある人々が大勢おり、国盛六街の二棟のビルが倒壊した現場では、ボランティアの消防隊メンバーが軍や警察に協力して秩序を守っていた。リーダーの頼瑞均さんは以前、兵役の一環として消防の仕事に従事したこ

とがあり、退役後にボランティア消防隊に入隊した。母親は息子が危険にさらされるのを心配し、あまり賛成できないでいるが、彼はこの有意義な任務にやりがいを感じている。

彼と隊員たちは二棟合計百十五世帯の住民が全員避難したことを確認するまで決してあきらめず、前後五回にわたりビルの屋内に入って捜索を行った。大震災から二、三日が経過し、二百回以上におよぶ余震の後、ようやく大地が静まると、住民たちは一時帰宅許可が出れば物を取りに家に戻ることができるようになった。その時も隊員たちは住民に付き添った。

通行止めになっても、くじかれることがなかった。

北部から雲門翠堤ビルにやって来た赤十字社のレスキュー隊は、震災発生後ただちに出勤した。蘇澳まで来たところで道路の封鎖に遭遇した場合には、列車に乗り換えてでも花蓮に向かう計画を立てていた。また、嘉義レスキュー隊は台湾を半周して駆けつけるなど、助けたいと願う人々の熱い思いに、感動を禁じえない。

旧暦の大晦日、避難所が次々と閉鎖され、県政府は避難者たちを福康飯店に移した。統帥飯店の前には、解体される前に一目見ておこうと多くの人が集まり、

て彼らの安全を守った。許可時間外に閉鎖区域に入ろうとする人がいれば、それを厳しく規制した。

政府と民間が密接に連携を取りながら全力で救助に当たったため、救援のスピードが増し、被害を最小限に抑えることができた。それぞれの事故現場に、地元花蓮の軍や警察、消防隊や救助隊のほか、国家レベルの中華搜索救難本部までが動員され、さらに台湾全土から数多くの志願救助隊や慈善団体、個人のボランティアが駆けつけた。何か少しでも役に立ちたいと願う彼らの強い思いは、花蓮と周辺地域を結ぶ蘇花公路が土砂崩れで一時的

かつてここで結婚式を挙げた人、宴会を開いた人、旅行に来て宿泊した人などが深く名残りを惜しんでいた。ホテルを定年退職した年配の元スタッフたちは、なおさら辛くやり切れないことだろう。

経営者はホテルの再建を考えているが、感情の面からいえば、やはり失ったものを取り戻すことはできない。数年後、人々はいったいどのような地震を語るのだろうか？ 私は、辛い記憶ばかりではなく、人と人との心温まる物語がたくさんあったということを、しっかりと心に留めておきたいと思う。

(慈濟月刊六一六期より)



花蓮慈濟志業隊 ただちに救援開始

2月6日

地震発生

23:50

静思精舎に災害対策本部を開設

23:55

2月7日

花蓮慈濟病院の全職員が緊急出勤し、負傷者の受け入れ体制を起動

00:10

静思精舎の常住法師は300人分の生姜茶、饅頭、香積飯（インスタントのチャーハン）を用意し、救助の最前線に提供した。その後も温かい食事を作り続けた
倒壊したビルの被災状況を調べるために、ボランティアが現場に駆けつけた

写真提供
花蓮本会



01:15

花蓮静思堂に花蓮地区災害対策本部、中華小学校に避難所、雲門翠堤ビルの近くに慈濟ボランティア拠点を設置

01:45

統帥ホテル、雲門翠堤ビル、中華小学校避難所に毛布、温かい食事、ミネラルウォーターとマスクを届けた。避難できるように慈濟基金会の敷地を住民に開放した

02:40

花蓮慈濟病院の医師が中華小学校の緊急救護センターへ出向き医療支援に参加

03:30

台北市内湖区にある慈濟環境保全センターがエコ毛布1700枚、マフラー2000枚を花蓮行きの列車に乗せた

06:00

花蓮中学校の教師と生徒が弁当作りに協力し、11時には最初の食事を発送した

10:00

證嚴法師が被災地を視察し、被災状況を把握した

10:30

被災状況に基づいて被災者名簿を作成し、午後には最初の見舞金を支給した

14:20



撮影・吳瑞祥



撮影・陳鏗木



撮影・陳安俞



撮影・陳何嬌



撮影・沈淑女

0206 花蓮震災 慈済の寄り添い支援

被害状況

- ▶ 2月4日 21時56分、花蓮近海にマグニチュード6.1の地震発生
 - ▶ 2月6日 23時50分、県庁舎の北東にあたる花蓮県近海にマグニチュード6.26の地震が発生。震源の深さはわずか10キロであった。花蓮市、宜蘭県南澳の震度はマグニチュード7に達した。この地震によって、統帥ホテル、雲門翠堤ビル、白金雙星ビル、吾居吾宿ビルが倒壊したり傾いたりした。
 - ▶ 2度の本震の前後3～4時間の内にそれぞれに5回ほど、震度5以上の前震と余震が起きていた。気象庁は2月12日までに300回以上の余震を記録したが、これは観測史上でも稀なことだという。
 - ▶ 死者17人、負傷者291人
 - ▶ 累計避難者数は830人に達し、花蓮県は県立体育館、中華小学校、自強中学校を指定避難所として開放した。
 - ▶ 台湾全土で学校の校舎に被害を受けたのは195校、そのうち48校が花蓮の学校。被害総額は3億円を上回った。
- (中央災害対策本部2月12日までの統計)

統計

- ▶ 温かい食事：16803食
- ▶ 支援物資：エコ毛布1801枚、生活必需品パック239個、組立式ベッド774個
- ▶ 見舞金配付：198戸。家屋の崩壊程度と世帯人数によって見舞金2万円、3万円、5万円を配付した（1元は約306円）
- ▶ 家庭訪問：1282戸
- ▶ ボランティア動員総数：延べ8046人（2月7日から13日までの統計）

慈済の援助

- ▶ 避難した住民に温かい食事、飲物、スナック、衣服を用意し、子供たちのための読書コーナーを設けた。
- ▶ 救助隊職員が食事や暖をとる場所として、多くのボランティア拠点を開設した。
- ▶ 葬儀社で助念（死者の冥福を祈って8時間念仏を唱える台湾の風習）をし、遺族に付き添った。
- ▶ 花蓮慈済病院は136人を受け入れた。病院はホットラインを設け、医師と精神科医が24時間体制で患者の相談に対応すると共に、被災者のための専門外来を設けた。
- ▶ 慈済ボランティア国際寮を開放し避難者を受け入れた。



精舎の尼僧

◎文・潘翠微 訳・本誌

永遠に慈濟人を支える後ろ盾

精舎の台所には夜通し明かりが灯り、生姜汁と饅頭が蒸し上がって熱い蒸気が上がっていた。精舎の尼僧達は長年の経験と鍛錬を積み重ね、指令がなくともただちに、救助の前線で活動する救助隊員の後方支援活動を開始した。

―― 月六日、静思精舎にはいつもと

していた。

―― 同じ夜が訪れていた。唯一特別

森の中の精舎での規則正しい修行生活

なのは、證嚴法師が二回目の歳末祝福会を終えて二十七日間の行脚から帰ってきたことだ。それは毎年の「静思精舎で新年を過ごす」活動の準備が最後のカウンtdownを迎えたことを意味

では毎日同じことが繰り返される。夜九時四十分の就寝の板を打つ音で、精舎は世から隔絶した静けさを取り戻した。尼僧達は全てのことを手から放し、エネルギーを蓄え、新しい一日を迎えるための

準備をする。

それから、皆が考えたのは、同じよう

深夜十一時五十分に、木造の窓とドアの揺れる音が聞こえ、夢の中でもすぐ地震だと分かった。揺れには慣れていたが、

に、花蓮市内などの場所は皆無事だろうか、ということだった。

振動はますます強くなり、ベッドの横の本棚から本とコップが落ちてきて、普段

この一刻、我々に何ができるのか

より強い揺れを見せた。あまりにも怖かったので、思わず声を上げて叫んだ。

ただちにノートパソコンをたちあげ、「0206花蓮地震防災総指揮センター」を設置した。テレビをつけ、地震に関連

精舎の建物が損害を受けたかどうかを調べた。やはり普通の地震ではなかった。水道管が破裂し、ドアと窓が落ちていた。壁

する情報を収集し始め、状況の把握に努めた。

と柱と屋根のコンクリートも、メインホルの燈管も落ちたが、幸い皆無事だった。

證嚴法師も書斎から出て来た。被害の情報を伝えるテレビ報道を見ながら、花蓮慈濟病院、学校及び各地の慈濟メンバ

ーが無事かを調べるように指示し、毛布や福慧ベッドなどの救済物質の在庫を確認した。

深夜なのに、皆は時間を忘れ、ただ何ができるかを一生懸命に考えていた。

慈済基金会の職員と地域ボランティアは、交通状況の安全を確認した後、それぞれ最も厳しい被災を受けた統帥飯店や国盛六街などの被災地域に向き、被害状況を調べた。職員とボランティアは続々と花蓮静思堂に入り、防災協調センターを設置した。

同時に、精舎の尼僧達は自ら台所へ向かい、炊き出しの準備を進めた。被災状

況はどこまで広がっているか分からないが、寒い中、救援活動の前線で最も必要なのは生姜汁と温かい食事だということを知っている。

今この時、證嚴法師がおっしゃられたように、精舎は全世界の慈済人の後ろ盾であることを深く理解できた。職員とボランティアが前線で被災状況を調査しているとき、刻々と変わる要求に応じて、精舎尼僧達と修行者達は随時最前線で救助に関わる人々を安心させ、後顧の憂いを取り除いているのだ。

精舎の台所には光が明るく灯り、尼僧達は生姜湯の準備をし、熱湯を用意

した。蒸し器担当の尼僧達は饅頭を用意した。夜中の二時に、五百人分の饅頭と生姜汁、それに五穀スープができあがると、二人の精舎の尼僧が統帥飯店、雲翠ビル、慈済病院の救急治療室へ届けに出かけた。

徹底的な奉仕により、 多くの人を成就させた

慈済ボランティアは災難が発生した現

●夜中2時過ぎに、地震が起きた。それから3時間経たないうちに精舎は温かい食事を用意し、救援活動の支援をした。(撮影・潘彦同)



場で、いつも真っ先に駆けつけ、最後まで残り、多くの被災者の傷ついた心を慰めてきた。今回の地震は、慈済の発祥地である花蓮に起きたため、證嚴法師は大変悲しみ、心を痛め、家をなくした住民たちが明日をどうやって迎えるのかを心配していた。精舎の尼僧達も随時待機して、被災者達の心のケアに当たった。

静思精舎の修行者達は、一日作さざれば一日食らわずの自力更生による純朴な生活を送っている。道場では持ち場を守り、各自の職務に励んでいる。

地震が起きた後、台所で毎回六百人分

被災者へと届けた。

とても間に合わないのではないかと、平常心で向き合い、悦びで善い縁を結ぶ疲れは感じないのか？ 体は疲れるが心は疲れない。この世こそが道場である。

無情の地震は死別の悲しみを与えた。正月の前に温い家庭をなくしたことで、どれほどの失望を人々は味わっただろう。天災は避けられないが、心が揺れないことを願う。

●静思精舎の法師と運営建設所の職員とボランティアが被害の大きかった七星潭に被災者を見舞いに訪れ、援助物資と見舞い金を配付した。

(撮影・鄭啓聡)



の食事を作り、残りの尼僧も、時間を調整して同じ鍋で被災者のための食事を用意した。

それぞれ違う地域から来た尼僧たちは、無形の心を通じ合わせ、ときばきと力を合わせて、被災者が避難所を去るまで七日間、温かい精進料理や生姜汁を提供し続けた。

お正月を迎える前のこの時期は精舎の一番忙しい時期だが、救済に当たっては、時間はさらに足りなくなった。それでも尼僧達は避難所を訪ね、毛布を配付し、温かい食事を作り続けた。證嚴法師及び全世界の慈済人からの労わりと祝福を、

負担ではなく感謝

救済が一段落して除夜がやってきた。尼僧達は少しも休む余裕はなかった。

大晦日のイベント「精舎で新年を過ごす」開催準備、宿泊や食事、交通、活動などの計画も事前の計画通り救済の活動と平行して進められた。精舎の皆にとって、これらの仕事は負担の増加ではない。人の群れに入り、この世の苦を体験し、人を助ける機会が与えられたことに、感謝の気持ちでいっぱいなのだった。

全世界の慈済人が精舎で年末を過ごし、訪問することは一年での最大のイベント

法の香りに浸り、慧命を増上し、交流にも法を取り入れている。自分の健康と家庭の平和を感謝すると同時に、世の中の苦しんでいる人のために、心を込めて敬虔な祈りと祝福を捧げるのだった。

今年最も特別なスポットは、全長約二百七十メートルの落羽松歩道である。百本以上の落羽松の間に、三本の歩道が敷かれている。法師が先頭に立ち、皆と静かに歩みを進め、心を静める。その中に自分の心を照らし出し、懺悔の気持ちをもち、過去を改め、未来に向かって修行することを心に決める。足下までこの心がけを行き届かせ、四つの誓願を立

だ。證嚴法師と除夜の食卓を囲むことを皆心待ちにしてきた。除夜と年明けの初日のピークでは、食卓の数は通常の六十卓から二百卓へと激増した。常駐法師とボランティアは、約二千人の食事のために、野菜を洗ったり切ったり煮たり、食器を並べたり、料理を出したりすることから、食事後の整理、処理、洗浄などは体力と忍耐力が試される大きな試練だ。

毎年のように人文ホール、小樹の屋、陶芸坊、菜園などでは違う内容のブースが設置された。全台湾から集まったボランティアのほか、精舎の尼僧達も忙しい中参加する。会場に来た人も法話を聞き、

て、この世でこの願いを実行するためである。

「多忙」という言葉は、尼僧達がこの期間中充実した日々を過ごしたことだけでは言い表せない。災難に対し悔いのない援助を行い、正月期間中の来客ももてなすことができたのは、すべて證嚴法師のご指導によるものだ。それによって、慈悲の心は行動に現れ、法を一人ひとりの心に残すのだ。

この世に奉仕を捧げる真心を持ってこそ、愛のエネルギーは絶えることなく、試練に耐えうる原動力となる。

(慈済月刊六一六期より)

●特別報道

大愛テレビ局 開局二十年

●1998年元日、大愛テレビが放送を開始した。2005年元日、大愛テレビ局は台北市閩渡の「大愛人文志業センター」に移転し、デジタル放送を開始した。

大愛テレビ局が開局して二十年が経った。二十四時間世界に向けて美と善を発信し、人々に道を示し、地球に代わって声を上げている。大愛テレビ局の運営資金は、ほとんどが少額の寄付金から成り立っている。このような大衆の支持によって、実在する人物のストーリーで感動的な番組を製作し、放送してきた。それをきっかけに、世界が台湾を知り、台湾から広い視野で世界を見ることができるようになった。

◎口述・葉樹姍（大愛テレビ局局长） 文・葉子豪

撮影・蕭耀華&黄筱哲 訳・心榮

伝法を実践し、共鳴した心をつなげる

清らかな泉は人心を浄化するための原動力である。

テレビ、パソコン、モバイルデバイスなどは全て「法水」を載せた機器である。

「スイッチを入れ、仏法を聞く」ことは自分のためになるだけでなく、

さらに拡散すれば、この世の美を広めると同時に善の種子を蒔いているのである。



證

證 嚴法師に初めてお目にかかったのは一九九〇年だった。当時「中央日報」や「天下雜誌」などがすでに證嚴法師に関する記事を取り上げていた。「慈濟功德会」という五文字には社会では善良というイメージが定着し、広めるのに最も値する事績となっている。私は、台湾テレビ局の「おはよう」というニュース番組で、「この世の愛」というコーナーを設け、慈濟をテーマにして二回放送したいと思った。

ところが、證嚴法師はインタビューを断られたため、精舎へ行く機会に改めて法師に取材を申し入れた。「毎朝六時半

から六時四十五分まで台湾テレビのニュースを見ていますよ」と法師がおっしゃり、私のことを知っていたようなので、インタビューを引き受けてくれる可能性が高まったと私は思った。

しかし、證嚴法師は、マイクをそっと横にのけて、「慈濟は私個人のものではなく、皆のものなのです。ほかの人をインタビューしてください」と言った。単独インタビューは実現せず、かわりに花蓮慈濟病院をテーマに二回の特集を制作することにした。その縁で慈濟と直接触れ合い、この団体について知るようになった。

大愛テレビ局が設立される前、慈濟で

は撮影チームが「慈濟世界」という番組を制作し、それを「力覇友聯U2」チャンネルを通じて放送していたが、私はボランティアの要請に応じて録画で慈濟の事跡を報道した。

大愛テレビ局が設立準備を進めていた時、私が以前政府系のテレビ局に数年務めた経験を持っていた関係から、会議に呼ばれて出席した。ある日、法師との座談会で私は「テレビ局を経営するのは、とてもお金がかかります。もし資金を延々と投入できなければ、維持していくことは極めて難しい」と反対意見を述べた。しかし、法師はそれでもテレビメディア

アを通じて人に良い影響を及ぼすべきだと信じた。慈濟人文志業の王端正CEOも、「大愛テレビは、一般的な社会の出来事は報道しません」とはっきり言っている。私は大胆にも、「それならばニュース性はどこにあるのですか？」と反論した。

すると、王CEOは、「何もないように実は意味深い内容を報道します。報道すべきこともあれば、報道すべきでないこともあり、私たちはポジティブなニュースを報道するのです」と答えた。

大愛テレビのニュース報道は「真実を報道し、大衆を正しく導くべき」と法師は繰り返し強調した。真実を伝え、なぜ



●2017年12月、大愛テレビ局の葉樹姍総監が、メキシコ地震災害支援の配付活動に参加した。ザカテペク市の配付会場で、彼女は「竹筒貯金」の精神を住民に説明した。

このことが起こったのかをはっきりと説明する。また、因と縁、果を説明するだけでは足りず、もっと大事なものは、いかにして人々を「正」に導くかであると。

法師は、「地球温暖化や氣候の変動に対処するには、私たちは心して日常生活の

習慣を変えなければなりません。これがその解決の方法なのです」と言った。大愛テレビのニュースを例にとれば、社会の時事や現象を報道するだけでなく、よい解決方法や素晴らしい出来事を前向きに報道しなければならない。

根本を守りながら
新しいアイデアを取り入れ、
広く良縁を結ぶ

大愛テレビ局ではニュースの報道やドラマなど番組の制作で忘れてはならないのが、法師が掲げる「人心の浄化」である。

例えば、今日放送した内容が人々に与えた影響が、負のエネルギーなのか正のエネルギーだったのかを考えてみる。自分の良心に聞いてみる必要があるのだ。

「大愛劇場」は、常に現在の人物のストーリーを放送しており、ストーリーのネタはつきない。ドラマ制作チームに新しいアイデアを取り入れるよう勧めても、真実を変えてはならない。それが私たちの守るべき本分である。

多くの芸能界の重鎮が法師に次のように進言した。「シナリオライターにもっと自由に書かせて、ドラマをもっと面白くしたらどうでしょう」。だが、ダメな

ものはダメなのである。法師が求めているのは、派手な演出で高い視聴率を稼ぐことではなく、真善美の物語が生み出す影響力なのである。

大愛テレビ局や人文志業についての理念を他人に説明する時、必ず五十年前に「慈済月刊」創刊号を発行した時の文章を用いる。「一文字一行たりとも無駄にせず、人々や社会に無益な話を書かない。また、主旨に反した感化を人に及ぼさず、『慈悲濟世』と関係のないことを絶対にしない」。テレビやラジオの放送でも同じように、人心浄化に無益なことを報道することで一分一秒を無駄にしてはなら

ないのである。

慈済人文志業は人類の歴史を記録し、時代の証言者として、記録して保管するにとどまるだけでなく、後世に伝わって広め、さまざまな影像や音声、写真など資産を活かして、「旧法新知」（過去の事を尋ねて改めて新しきを知る）を達成すべきである。

以前、テレビが主流で、インターネットはその付随物だった。しかし、今の若い人はあまりテレビを見なくなり、スマートフォンからあらゆる情報を得て、自分の見たいものを選択する。そこで私たちも心してネットワークプラットフォーム



ムを取り込まなければならぬ。「法水が人心浄化の原動力となる」ように、テレビやパソコン、スマートフォンが「法水」を撒く道具となるのである。

ボランティアが「広く良縁を結ぶ」ように、ここ二、三年前から私たちは「連携」を重視している。我々とし

●葉樹姍総監督は、メキシコ地震の被災者を見舞い、心の痛みを取り除き、笑顔を取り戻すよう励ました。



ようこそ！ 大愛テレビ コミュニティー家族へ



ては、「良」は問題ないが、「広」を達成しているだろうか？ 「同じ視聴者層」から一歩踏み出しているだろうか？ それを乗り越えるには、より大勢の人々と結びつく必要がある、話上手でしかもその話を善用するテクニックを用いて、多様なプラットフォームの開発に力を尽くさなければならない。

プラットフォームが異なれば、視聴の仕方も異なり、また視聴者層によって好みも違ってくる。したがって、大愛テレビ局は、自分を守りながら創意をこらし、忠実な視聴者や慈済人を大事にして「初心」を忘れないようにしなければならない

い。「創意」というのは、時代とともに進化し、新たな視聴者層に広めることで、より多くの人に多様なプラットフォームを通じて、様々な角度から慈済を理解してもらおうのである。

「環境保全ボランティアをはじめ人文真善美ボランティアや全世界の慈済人は、メディアを通じて人心を浄化する方法に呼応する形で、私たちのやり方に賛同してくれている。みなさんの心からの支援に感謝しており、大愛テレビ局もより素晴らしい、充実した内容の番組を制作して、もっと多くの人に認められ、善行の列に加わってくれることを期待している。

静思一刻

静思一刻：日常の美しい場面の写真をアップロードしたり、静思語を一つ選んでオリジナルのカードを作ることできる。それをダウンロードして祝福カードとして親しい人に送るのもよい。

志工早會

ボランティア朝会：毎日7カ所のボランティアがネット回線を通じて話す出来事の内容を知ることができる。

行願人間

人間行願：仏法に関する番組には、「静思妙蓮華、菩提心要、衲履足跡、證嚴法師が語る物語」などがある。

即時新聞

最新のニュース：最新のニュースを随時ダウンロード、転送できる。スマートフォンにタッチすれば最新報道が見られる。

TV直播

TVライブ：携帯電話やパソコンから大愛テレビと大愛ネットラジオの放送が視聴できる。

人間菩提

人間菩提：毎日の證嚴法師のお諭しを映像と文字で再現する。

我在現場

私も参加している：イベントをライブ配信し、実際に参加できなくても、見ることで参加することができる。



スマートフォンやパソコンでも使用でき、また、ホームページをスマートフォンのメインページに設定することもできる。

バングラデシュBRACのCEO

ブアズレ・ハサン・アベッド氏に 「社会事業」について単独インタビュー

全力を傾けて貧困からの離脱、識字率の向上、農業や食糧の安全対策を提供することに尽力するBRAC創立者でCEOでもあるブアズレ・ハサン・アベッド氏は、二〇一七年、フォーチュン誌に、世界で最も影響力のあるリーダー五十人の中の一人に選ばれた。二〇一七年十月、八十一歳になつ

たブアズレ氏は台湾を訪れた。そして大愛感恩科技会社を訪問し、本誌がブアズレ氏に単独インタビューした。「社会事業を通して、どのようにすれば貧しい人が貧困から離脱できるのか。また、NGOの運営を永續するにはどうしたらよいか」について意見交換を行った。

質問：貴方が社会事業を興した理由は何ですか？また、単純な募金活動でBRACの資金問題を解決しないのはなぜでしょうか。

答え：バングラデシュは世界最貧国の一つであり、改善しなければならぬ問題がたくさんあります。一九七〇年、我が国は自然災害に遭

ブアズレ・ハサン・アベッド (Sir Fazle Hasan Abed)

1936年、バングラデシュで生まれた。かつてはロイヤル・ダッチ・シェルグループ会計部の上級管理職を務めた。1972年、バングラデシュに公益財団法人「バングラデシュ農村発展委員会」(BRAC)を創設し、貧困救済、小額信用貸付、農耕指導などを行っている。

BRACは11カ国において、1億3千万人以上を支援してきた。国際的な規模の「国境なき社会資源建設組織」になった。配下には、バングラデシュの最高学府のBRAC大学を含む48000校の学校を所有し、12000個の地域発展のための関連組織を持つ。運営している社会事業には、乳製品の会社や銀行、電子決済プラットフォームなどがある。



マメ辞典 社会事業

「社会事業」の形態は様々で、非営利事業団体もあれば営利会社もある。両者の共通点は、商業行為により社会あるいは環境の問題を解決していることである。社会事業は営業許可を得られるが、実務者が給料を得る以外、会社所有者や投資者には株の配当やその他の利益分配が一切ない。すべての利益は共益事業に投入したり、組織の維持のために使われ、社会や環境保全の問題を引き続き解決できるようになる。(資料ソース：「社企流」ネットワーク、大愛感恩科技会社ネット)

遇し、貧困層の人々が大勢犠牲になりました。一九七一年、バングラデシュはパキスタンから独立しました。その後、私はBRACを創設して、戦争で発生した難民を支援してまいりました。当初、募金に頼る方法をとりましたが、救済活動の範囲がどんどん広がっていったため、社会事業に発展させることにしました。自給自足ができるようになると、末長く安

定した状態が保てると考えたのです。我々の社会事業は、人を支援することに関連しています。例えば、バングラデシュでは、大勢の農家が不作になる原因は、良質な種子が不足しているためです。そこで私は高い品質の種子を提供し、彼らの生産性を高めることができました。それから種子の店や種子銀行を設立しました。このような社会事業の力で彼らが貧困から脱するこ

とを助けたのです。

しかし、農作物の生産量を増やすだけで、市場を開拓しなければ、農民の生活は改善できません。そこで、バングラデシュにおける最大の乳製品生産会社を持つBRACが国内の牛乳を買い集め、乳製品に加工し販売することにしました。

別の例として、私達は手工芸品の店をたくさん持っているのですが、女性向けに衣服や絹製の製品を仕入れ、店で販売しました。それは彼女たちの生活支援を確保するためでした。かつて店員に売り上げのことを聞くと「今日は、上々ですよ」との返事

でした。私は、「それらの売上金は大勢の人に就職の機会を与え、彼らの現況を変えて生活が良くなるでしょう」と彼女たちに話しました。

貧困者に対応し支援すれば、彼らがどん底から立ち上がれるのでしょうか？

答え：貧困者は自ら自分の運命を変える重要な役割を持っています。BRACの役割は、貧困者の運命を変えるために、有利な環境や基盤を創り出すことです。

私達は「少額信用貸付」を行っていますが、それは一般の金融支援を

●ブアズレ氏（左）は慈濟実業家ボランティアが設立した社会事業会社、大愛感恩科技会社を訪問し、社長の李鼎銘と記念写真を撮った。

（写真提供・大愛感恩科技会社）

得ることのできない貧困者だけにお金を貸し、彼らが生活必需品や家畜などを買うことができるように支援するものです。しかし最も重要なことは、真面目に働きたいという気持ちを彼らに持つてもらうことです。得た資源をうまく運営することで、いつしか借り入れた資金を返済できるようになり、自分も平穩に暮らせるようになってほしいのです。

質問：あなたはどのにして十一万人もの従業員を持つBRACという組織を管理し、管理下のNGOや社会事業企業の経営方針を終始一貫して保っているのですか？

答え：慈善と利を得ることは対立することではありません。私達の組織は巨大なので、規律を中心に管理が行われるべきであり、誰か一人がすべてのことを決定するのではなくあります。組織の中に大勢のリーダーがいて、受け持つそれぞれの健康や教育等の分野で尽力しているのです。

各々のリーダーは専門知識を持ち、

すべての部署には決裁機関を置いて、組織の決定事項は決裁までに何度も検討を経て進めるのです。年始に必ず年間の事業計画を提出して、年末には達成率を点検します。また、五年毎に戦略の修正計画を立てます。我々は誰かが過ちを犯すことを恐れず、チャンスを与えます。過ちから何かを学ぶことができたなら、それは次世代のリーダーを育てることになります。

NGOで働く人は、「愛はあるが、仕事には効率があるとはかぎらない」と思われがちですが、私はNGOがやっていることを「効率があり、公益も



ある」ように願っています。そうすれば社会のさまざまな問題が解決できると思います。私は、「とりあえず一般の企業で二年間ほど働いて、組織の管理や各マーケットの考え方を学んでからNGOに来なさい」と若い人に提言しています。

質問：経営において、挫折や失敗した経験はありますか？

答え：もちろん、私達にも失敗した経験は多々あります。例えば一九九〇年の初めごろ、BRACは国連の世界食糧計画署と提携して、養蚕の合作を行い、バングラデシュで

二千五百万本の桑を植えることを計画し、まず私達は二千人の農民を募集して桑の苗を培養しました。その後、一万一千人の婦女を雇用し、各地の道端の公有地に桑の木を植えました。このプロジェクトに参加した婦女は、毎月五十キロの麦とトウモロコシを収穫しました。

ところが、一九九四年には思いがけない大洪水に見舞われ、植えた桑の木は全部水に浸って死んでしまいました。それが私にとって最大の失敗でした。あれほど大勢の人と資源を投入したのに、期待した効果に到達しませんでした。それからこの教

訓を胸に、桑の木を小高いところに植えることにしました。この計画は今もまだ続いています。

質問：あなたの見たところ、台湾でのNGOとバングラデシュのNGOとの間に、問題の解決方法に対して、なにか違う点はあるでしょうか。また、お互い参考になる部分はありませんか？

答え：バングラデシュのNGOは、最も基礎的なサービスを提供しています。例えば、村で基礎的な教育を行っているのですが、このようなことは台湾ではすでに完備されています。

慈済とBRACはともに慈善団体です。しかしお互いに差異が非常に大きいのです。慈済は、緊急支援の対応を重視するので、実際の功績を称えられています。

慈済の社会事業・大愛感恩科技会社の製品は私にとって深く印象に残りました。とりわけ回収したペットボトルで再生した毛布はまさに愛のギフトだと言えましょう。すべての製品が創意に富み、実用性を兼ねていました。このように愛を以て実用的な製品を作り出すことこそが、公益と環境保全の結びついた最良の模範だと思いました。

僕がパパの目になるんだ

彼らはシリアからトルコへ不法入国してきた。
ただ子供たちに明るい未来を与えるために…

「待って、パパはどこにいるの？ 僕の
パパは目が見えないから僕のそばに座ら
ないと」と、シリア人の慈濟ボランティア
アに助けられて先に車に乗り込んだシリ
ア難民のアリー君は心配そうに言った。

●シリアからトルコへ不法入国した目が見えない
アラディンと息子のアリー。

六月二十三日の午後六時、九人乗りの
車を運転したボランティアは、トルコ・
イスタンブールのアルナブト市の中央バ
ス停留所で、仕事を終えた父のアラディ
ンと息子のアリーを載せて自宅へ送り、
インタビューをすることになっていた。
アリーの父親は両眼を失明している。





●シリア人の慈済ボランティアが、アリーを訪問して嬉しそうに話している

車から降りる時にアリーは父の頭がぶつからないように素早く手をかざした後、飛び降りて父の手を取り車から降ろした。そして一歩一歩手を引いて、古びたアパートの階段を登っていく。

階段は狭くて段差が不揃いの上に暗い。同行したボランティアのオサマは、目の見える人でもこの階段を昇り降りするのは大変だ、まして目の見えないアラディンにとってこれは難題だと言った。

パパが客間に座ったのを見届けると、アリーは素早く寝室に入ってママの腕か

らまだ一歳にならない妹を抱いてきて、私たちに家族全員を紹介してくれた。

アラブ社会では、異性の客が訪ねてきた時は、女性は部屋から出ず、男性に顔を見せてはいけないことになっている。だから、男性ボランティアは男主人の家にいない時には訪問ができない。

アラディン一家は、慈済がトルコでケアを行っている七百三十二世帯の家族の中の一つだ。三年前、彼らがシリアからトルコへ不法入国した時は、多くの恩人に助けられたことに感謝していた。トルコの憲兵は目をつぶって、失明した彼と家族を明るい未来の道へ歩かせてくれた。

アリーは毎日父親と一緒に街頭で水やペーパーナプキンを売っている。父親はアリーに、人は貧しくても志まで貧しくなっていないことを教えている。

聞いている私は涙がにじんでカメラのレンズが曇った。子供たちの将来を思っていないかったら、死を覚悟してまで異郷に逃げ延びては来なかっただろう。毎回シリアの人々の艱難辛苦な体験を聞くたびに心が痛む。また、それが、無常な人生において戒を慎み、さらに心から娑婆世界の覚有情に感謝しなければならないと、私たちに教えている。

(慈済月刊六〇八期より)

無明を打ち破る

◎文・釋徳仇／訳・済運



一時の享樂は
目の前を通り過ぎる煙のようなもの。
積もり積もって
世の中を深く傷つけるのです。

慎重にわずかな偏りも許さない

古来より曆は太陽と月の運行で正確に計算され、人々の生活の拠り所とされて来た。そして、地球の公転と自転の周期から一年がおよそ三百六十五・二四日であることが分かり、それ故、四

年に一度一日多くなるため、閏年うるうとしとなって二月が一日多くなるように調整されている。今は天文学の観測によって閏月や閏日で少数点以下の時間を調整するだけでなく、閏秒でわずかな時間の誤差をも調整している。

二〇一七年十二月三十日のボランテイア朝会で上人がこんな話をした。「人類は古来から蓄積を観察する智慧を用い、正確で実用的な曆を作り出しました。現代科学は時間の周期に対して一層細かく計算できるようになりましたが、個人としては一分一秒たりとも心の方向が逸れてはいけません。さもなければ時間の経過と共に正しい方向からますます遠ざかってしまうのです」

「一日は八万六千四百秒です。一秒一秒の積み重ねで一日が成り立っており、時間の経過と共に動く心が蓄積して固定觀念になってしまいます。したがって、常に自分の心に注意し、少しも逸れてはならないのです」



新年を迎える時、多くの人は祝賀活動に参加し、夜通しで祝っている。もし、どこかの県や市が花火を中止すると決めると、皆失望する。大気汚染などとは言いが、打ち上げる時間は長くはないのだから、ちよつと楽しむぐらい何が悪いのかと思っている。

「一時の目の前の花火と煙を求めるのは凡夫の心であり、今年
の文字に選ばれた『茫』にそれが表われています」。凡夫の心は茫然として目標もなく、道理を弁えず、是と非の区別もつかない。しかし、道理を弁えている人は心が明快であるべきで、とくにこの大変な時代では是と非を明快に理解しなければならない。大無明の社会では一層大きな智慧が発揮されなければならない。

「一時の享樂は目の前を過ぎる煙のようなもので、些細な行為が積み重なって深刻な汚染や破壊をもたらすのです。智慧を発揮して無明を打ち破り、一時の欲望を抑えれば、人心を浄化でき、天地をも浄化することができますのです」

忍耐強く、速成を求めない

上人のお諭しの翻訳に長年携わってきたアメリカの葛彬師兄たちとの談話を、ホンジュラスの張鴻才師兄の長男、張佑勤と四男の張佑偉が横で傍聴した。

上人は、「慈濟月刊」に載っている数多くの感動的な実話が、長い文章ではなくても、深く報道されていて、人々に感動を与えていることに言及し、「もし、英語に翻訳して広めることができれば、とても良い教育材料になるでしょう」と言った。

「今、科学技術は多様化し、若者は映像や音を通して情報を受け取ることが好み、忍耐強く本を読むことが少なくなっています。もし、若者の趣向に合うように一、二分間の宣伝映像を作成しても、この短い時間で道理を理解してもらうのは容易ではありません。忍耐を養うことを怠ってはいけません」と上人は



言った。「もし、何事も速成を優先し、目的を達成するために好まれる方法を採用すれば、若者の欲望はますますふくらみ、永遠に満足することを知らなくなり、逆に彼らを傷つけてしまいます」

「仏法を求めて学ぶのは心を満たし、欲望を減らすためです。心が無欲になれば、常に心安らかで自在な境地にいられます。修行して仏法を学べば、この世で追い求めるものが最終的には空であることが分かります。ただ、真の『空』の中にも奥深い真実の道理があります。それはすなわち誰もが仏と同じ悟りを開く智慧を持つているということです」

また、上人はこう言った。「宗教を信仰するには智信、正信がなければならず、神頼みを抛り所とするような気持ちではいけません。自分を守るのは自分しかなく、善行するのも悪行を行うのも心次第で、作った因に伴って果はもたらされます。異な

った宗教信仰は尊重すべきですが、自分が信仰する方向も見極めなければいけません」

「時間を大切にし、有意義なことをし、無駄に時間を過ごすべきではありません。時間はあらゆることを蓄積することができます。一瞬一瞬に湧き起こる考えは絶えず蓄積され、この世を利する志業を成就させることも、また反対に、多くの災害や苦痛をもたらすこともできるのです」と上人が集まっていた若い人に向かって諭した。

「五十年以上前のあの思い、あの一瞬が五十年後の慈濟を成就させたのです。もし、あの思い、あの一瞬がなかったら、今日のあなたや私、彼我が一堂に集まって共に善行をすることはなかったでしょう。あなたたちがこのような観念をしっかり身につけ、自分の生命のために慧命を成長させていくことを願っています」

(慈濟月刊六一六期より)

無言の良師―宥安、 ありがとうございます

宥安は臓器寄贈と献体という無償の願を全うし、
短くも美しい人生を卒業しました。

彼は、私たちに愛とは次から次へリレーすることだと教えてくれました。
安らかに自由自在で卒業旅行に行ってらっしゃい。

そして、もう一度私の学生になって戻ってくださることを願っていますよ。

私が校長になって十八年。いつも卒業式では卒業証書を読んで、そして大きな声で卒業生に「おめでとございます」と言っています。しかし時には病室や葬儀場で卒業証書を授与しなければならないこともあります。それは私の校長としての人生の中で最も辛いことで、卒業式を待たずに旅立つ若い学生を前に胸が痛みます。

今年、学校の卒業式が終わった十時間後の翌日六月七日の朝、空を見上げると、梅雨明けの太陽の光が燦々と輝いていました。しかしこの日、私は台北の第一葬儀場に駆けつけました。もう一つの「卒業式」に出席するために。
会場に置かれた遺影は、いつもの親しみのある笑顔で私を迎えているようでした。しかしできることなら、いつものように私の前に立って、卒業証書を受け取って「ありがとうございます」と言っておほしたかったです。彼は学校で表彰委員をしていました。表彰式の時にはいつもネクタイをつけ、賞品や賞状を載せた黒いお盆を持って私の横に立ち、私が学生たち一人一人に賞状を授与するのを手伝ってくれていました。

それなのに今、私の目の前には彼の遺影があるだけです。私は泣くのをこらえて、一字一字、卒業証書を読み上げ、彼が学業を修了し、そして一生分の宿題も完成したことを祝ってあげました。この卒業証書に記載されている名前、それは陳宥安です。

青春はいつも輝いている

宥安は温かく幸せな家庭に生まれ育ちました。両親には二人の娘が生まれた数年



●クラスメートと一緒にボランティア活動に励む宥安（一番左）
（写真提供 新店高中）

後、この可愛い男の子が誕生しました。まるで神様から授けられた小さな天使のように、可愛く、思いやりのある子でした。一家を楽しませてくれて、家族たちにも大変可愛がれていました。

宥安は彼の優しいお母さんに似て、小学校から中学校まで、いつも自発的に体の不自由なクラスメートに手を差し延べ、寄り添ってあげていました。

宥安は慈済との縁を早くから結んでいました。中学校の時、足に壊疽ができて、台北慈済病院で治療を受けたホームレスの貴さんという人を、慈済ボランティアの宥安のおばさんと大安区の陳明裕さんがケアしたのです。それをきっかけに貴さんと知り合った宥安は、以来、毎月街で貴さ

んが雑誌を売るのを手伝い、二年前に貴さんが病気で亡くなるまで続けました。

人助けに熱心な宥安は、中学校卒業後、志望校の新店高等学校に入学できました。この学校は「生命教育」を重視して道德教育を推進しており、「月に一回愛を贈る」という奉仕活動を行っています。学校の内外の様々なボランティア活動に、宥安の姿がよく見受けられました。二年前、台風十三号が台湾北部を襲い、新店と烏来に甚大な被害をもたらしました。慈済ボランティアは自分自身の安否を考えずに被災地に駆けつけて、清掃支援を行いました。そのボランティアが年配者ばかりだったので、それを見た證嚴法師は若者も救援に参加してほしいと呼びかけました。

新店から烏来に向かう途中にある亀山小学校は、一階の高さまで浸水しました。夏休みが終わって間もなく始業式という時でしたので、「亀山小学校をきれいにしよう」と證嚴法師が再び呼びかけたので、新店高校の先生と学生たちも一緒に片付けや復旧の手伝いをしました。大愛テレビ放送の画面にも、宥安の姿があつて、袖をまくりあげて、机や椅子を運んでいました。

誰も知らなかったのですが、宥安はスポーツ選手でもありました。陸上競技と

水泳で賞を取ったこともあります。しかし脳に腫瘍ができて、高二の時に悪化し、何回も脳の手術のために病院に入退院を繰り返しました。這ったり、歩いたりのリハビリから始めなくてはなりませんでした。心優しい宥安は、家族に心配をかけたないように、痛くても苦しいとは言わずに、ただ再び学校に戻られる日を待っていました。

宥安自身、この病気が完治するのは難しいと分かっていました。ある日おばさんが、仏陀が自分の身を捨てて鳩を救った物語を話してくれました。この話を聞いて、宥安はもしも自分の病気が治らなかつたら、臓器を寄贈したいと希望し、臓器の寄贈同意書にサインしました。

今年の四月から五月にかけて、宥安の病状がひどくなりました。クラスメート皆が祝福のカードを書き、学校も先に卒業証書を作り、病室まで持って行きました。五月二十二日、家族は彼の身を捨てて愛を施す願いを遂げさせるため、救急医療を放棄し、寄贈できる臓器をすべて寄贈しました。それには角膜と一枚一枚の皮膚も含まれていました。

宥安の青春は、短くとも華やかで美しい時間でした。まるで菩薩の化身のように自分の命で多くの人の命を助けたのです。

● この特別な卒業式で、宥安が自分の人生を卒業したと私は宣言しました。安らかに自由自在な心と体で卒業旅行に行つてらっしゃい。そして、遊びに夢中になりすぎずに、願を立てて再びこの世に戻って、もう一度私の学生になるよう期待していただきます。

燦々として眩しい太陽の光が葬儀場の外側に差し込んできました。いよいよ宥安が出発する時間になりました。私は学校の先生と学生たちと一緒に、恭しく深々と頭を下げました。

無言の良師―宥安、ありがとうございました。君のおかげで私たちは静思語にある言葉「人生は自分のものではない。ただそれを使うことが許されている」の意味がもつとよく理解できました。いつか命を手放す時は、君と同じように「生々流転」となるよう命をリレーしていきたいと思っています。

（慈濟月刊六〇八期より）



【證嚴法師のお諭し】

◎ 訳・慈願 絵・葉錦蓉

大愛と善行、 福を世界に

大愛を以って友と共に

愛のエネルギーを凝集して

苦難の人を護り

善行と愛を共に天地を護り

人々の奉仕で

この世の災難を減少させよう

極限の悲しみは言葉では言い尽くせない。二月六日の深夜十一時五十分、瞬時に天地が揺れ動いて、花蓮市街地のビル数軒が傾きました。多くの人が閉じ込められたり行方不明であること、また数百人が重軽傷を負ったと聞き、私の心は真っ白になり、台湾中部大震災発生当時の「極限の悲しみ」に襲われたように、言葉ができませんでした。

熟睡中の人たちは慌てて飛び出し、救難救助隊員はただちに傾いたビルから人々を助け出しました。身一つで飛び出した人たちは、この寒空に

薄着と恐ろしきで震えていました。

その中で菩薩が地面から湧き上がったかのような、ボランティアたちや救難救助隊員は一組一組とリレー式に救助に当たっていました。続けざまに襲ってくる余震の危険を恐れず、傾いたビルの中へ入って、少しでも生命の兆しがあると瓦礫をかき分け、分秒を惜しんで一人でも多く助けようと懸命に励んでいました。

地震によって十七人の貴い犠牲者が出たことは遺憾でした。その中には観光スポットの花蓮を楽しみにして訪れていた外国の観光客もいたそ

うありません。この世は無常、国土は脆いことを目の当たりにして、感慨深いものがありました。



瞬時の天変地異の記憶を消し去ることはなかなか難しいものです。二月初め、私は台中で歳末祝賀会を行っていた時、心の中で十九年前の台湾中部大地震の悲惨な様子が、はっきりと心に浮かび上がっていました。台中から南投まで、すべての歳末祝賀会の会場で皆に当時の復興支援へ

うです。思いもよらずこの大地震に遭って、今度はこの山水と魂を共にすることでしよう。人生無常、予期せぬことが瞬時に発生します。たとえどんなに健康、または若くても、無常にあえば自分の思いのままにはなりません。これが因縁というものですが、非常に心が痛み、忍びない思いがします。

私は花蓮へ来てから五十年以上になります。常に地震が起きていましたが、今回のように大きくて密集した余震はありませんでした。どんなに堅固な建築でも強烈な揺れにはか

の感謝を忘れずにと論していました。花蓮へ帰る時、見送りに来た新店慈濟病院長の林欣栄院長が「昨日の強い地震の時、ちょうど手術中でしたが幸い何の影響もありませんでした」と報告していました。

思いもよらず、その深夜にさらに大きな地震が起きたのです。重大な災害状況を聞きつけて、私は真っ先に電話で林院長に連絡を取りました。負傷者が次々に搬送されて、医療スタッフはただちに集合して医療に当たっていると聞いたので、私は感謝し、人々が平穩無事であることを祈つ

ていることを伝えました。静思精舎では早朝より徹夜で絶えず生姜汁を作つて、被災者や救急隊員の防寒と飢えに備え、また毛布を配ったり、折り畳みベッドを臨時収容所へ運んでいました。

その夜、私の心は悲しみでいっぱい、夜が明けるとともに市街地へ災害状況を見に行きました。ある所では道路が地震によって隆起していましたが、大方の家屋は無事であるのを見て、気持ちには不安から幸いと感謝に変わっていき、密集している市街地の家々が無事であることに感謝

していました。

被害が重大だった場所に近づくくと、私の心は再び波打ちました。黄色の立入禁止のテープで囲まれた封鎖地域内のビルは、傾いて屋根が見えて、六階建てのビルは二階が一階になっていました。瞬時にビルを崩落させた天地の威力のすさまじい有様は、十九年前の台湾中部大地震の時のようでした。

中に閉じ込められ、恐ろしさと苦痛の中助けを待つ人々は、一秒が一年のように感じられているでしょう。また救助隊員は梯子に登ってビルの

窓から屋内に入って被災者を探しに行っています。小雨の降る寒さの中、私の心は形容のできない悲しみを感じていました。

多くの花蓮に住んでいる慈済人は、天地が揺れ動き家具や物が落ちる恐ろしさを体験したものの、無事であるのを確認するとすぐにボランティアの制服に身を固め、出動しました。寒風の中整然と救済物資を運んだり、臨時収容所へ避難者に寄り添ったり、また、日夜交代で温かい飲み物や必要品を救急隊員や被災者に提供していました。平常から彼らが「大愛を

以って友と共に」の精神で行動に移したことは、「善行共福を以て天地を護る」ことの実践です。

連日のように捜索隊は救援に尽力していました。この大変な苦労と勇敢な任務と、この世の愛に感動しました。慈済人の被災者に寄り添い、必需品を提供している姿に、「他人の苦難を見るに忍びない」慈悲の心を見ました。愛は血縁に限るでしょうか？ この世にいる人々は皆が一つの家族です。分け隔てのない愛の力は「この世に愛がある」と言うことです。

災難を見て人性の善を実証 愛で人々を抱擁することができ

災害後、花蓮慈濟病院はただちに傷病者処置体制を整え、医療スタッフは病院に駆けつけました。彼らは震災後、目覚めて頭に浮かんだことは、命を守り救うことでした。

また、花蓮にある慈濟の学校では、冬休みで大部分の学生は帰省していましたが、校長や教師たちは留学生を慰め、救助活動に参加するようを勧めたことにも、感謝しています。奉仕する中で、自分の心を落ち着か

せるだけでなく、この世の無常と苦難を見ることができました。

医者や花蓮、他県のボランティアですが、自発的に速やかに駆けつけて、被災地で夜に日を継いで奉仕している姿は、愛の表われでした。人々は和合協力、共同の善行、大愛を以て共に苦難の人たちに寄り添いました。

強震は瞬時のうちにすべてを変え、人々を悲しみの淵に陥れました。陰鬱が速やかに過ぎ去ることを願い、人々の愛の力で、すべてが新しいスタートを切れることを期待しています。

呉義湖さんは統帥飯店の真向かい

で食堂を経営していました。目の前で瞬時に傾くホテルを見て、自分の店がめっちゃめっちゃになっているのかまわず、地震がおさまると、すぐにヘルメットについている明かりを頼りにホテル内に入って数人を助け出しました。雲門翠堤ビルの隣に住んでいる黄玲珍さんは、地震でエレベーターの中に閉じ込められていましたが、隙間から何とか逃げ出しました。まだ恐怖がおさまっていなかったのですが、近隣の災害状況を見て、慈濟の使命感を自覚し、ただちに救済に参加していました。

雲門翠堤ビルの付近に住んでいる呉志慶さんは環境保全ボランティアでした。倒壊したビルを見て、慈濟法門の廖連逢夫妻が六階に住んでいるので、梯子を持ってきて窓から入り、救援隊の来る前に夫妻や二十人以上を救け出しました。その後、三人は慈濟の支援活動に参加しました。

危険な時は誰も恐ろしいのですが、こんなに勇敢に人助けをする人たちもいます。感動的な話はたくさんあり、言い尽くせません。お互いに血縁はありませんが、しかし「無縁大慈同体大悲」を心に奉仕していまし

た。これらを見て、人々の本性は善良で大愛を発揮することができ、人々を抱擁できるのだと実感します。

この度の災難で台湾の生命力が実証されました。「善」とは「愛」の気力です。この善と愛の力は感動的で、皆が大切にするように期待しています。

愛の心を広げて

天地と共に生きる

天長地久、大愛を以て

地球村を抱擁しよう

台湾中部大地震が過ぎてから十九

蓮の静思堂で「祝福花蓮祈禱音楽会」を催して、被災者や恐ろしい体験をした人たちを慰問しました。

演芸会の人たちが花蓮へ来て、素晴らしい歌声で慰問して下さったことに感謝しています。歌手の萬芳さんが花蓮へ着いた時、お姉さんは雲門翠堤ビルの隣の中華小学校に避難していましたが、慈済人がずっと寄り添い、夜になるとさらに多くの人がいてくれるので「そばに慈済人がいてくれて助かった」と感動して心が安らかになっていました。ですから萬芳さんは感謝の気持ちを歌声に

年近くになりました。当時世界から集まった愛と善の力によって、台湾はいちはやく震災の陰影から復興することができました。この度、花蓮が受けた地震で、大地と人心の傷はどのように復興するでしょうか？ 同じく「愛」です。人々の發揮する愛の力の奉仕が必要です。

頻繁に起きる余震に、多くの人は驚いて雨の降るテントの中で我慢し、建物の中には入りたがりませんでした。地べたで寝て、心身とも安らかになることができません。二月十一日、捜索隊は捜索を終え、慈済は花

して、郷里の花蓮の人たちと慈済人に捧げました。

世界に地、水、火、風各種の災難が頻繁に伝わっています。二〇一七年慈済は数十の国家を支援していましたが。二〇一八年に入ったばかりの時に花蓮で強震が発生すると、かつて支援を受けた国々の人たちからお見舞いが伝えられています。

トルコの慈済人は長年シリア難民に寄り添ってきました。現地の慈済マンノウォー学校の難民児童は、台湾の強震を知ると祈禱するだけでなく、竹筒貯金箱に寄付金を入れてく

れました。マレーシア、米国の慈済大愛幼稚園の子供たちも同じく台湾のために寄付金を竹筒に入れて、人々にも寄付を呼びかけていました。

メキシコのボランティアは街頭募金、カンボジア、フィリピンの千人以上の人たちは集まって一緒に祈禱しました。種族、宗教の差別なく、心から花蓮の平安のために祈ってくれていることに感動し、感謝しています。

彼らの大部分は、かつて慈済の支援を受けた貧しい人たちで、心から誠意を表しているのも愛の力、人類の温情であり、その実は「大愛を以つ

て友と共に」ということです。

愛は極限の小さな範囲ではなく、愛の奉仕があつてこそ愛を得ることができません。天の下、地の上にいる人々のみな一つの家族です。心を展開し愛の心を広めましょう。天地と共に生き、大愛を用いて地球村を包容しましょう。天長地久、共に愛がありますように。

●
人心の欲念は絶えず増長し、したい放題、享樂のために、絶えず大地を

破壊して空気汚染になり、地球にとって耐えられない負荷になっています。災難は大自然が発している警告で、災難に対しては尽力して奉仕する以外に、さらに懺悔心を起こして時と人生を無駄にはいけません。

人力が天に勝ることは不可能です。この世の平安を願うなら、人々は戒を慎み天地に対しては敬虔であること、心の動きや、一挙手一投足のすべては天を敬い地を愛さなければなりません。福とは求めれば来るのではなく、奉仕してこそ造福が叶い、福が増してこそ災難が減少するのです。

皆さんがただ待っているのではなく、行動を起こすことを期待しています。まずはやってみましょう。心に善と愛を描き、お互いを祝福し合い、善行によつて福を広めましょう。大愛で全宇宙を満たしていきましよう。そうすれば私たちの社会は自然と睦まじく、平和になるはずですよ。

人生は無常ですが、愛の力をその時に間に合わせなくてはなりません。今この時を心して使い、心を無限に広げ、愛を惜しまず、確実に尽くしていくのです。

(慈済月刊六一六期より)



法の香りに浸る

◎口述・蕭銘興 編集・江翎禎 訳・山田智美

一つの灯が千年の暗闇を取り払う

小学校を卒業しただけの私は、根機（仏の教えを聞いて悟りを開く資質）に欠けているとずっと思っていました。大愛テレビで「静思晨語」を観ながら、書き留めようと思うのですが、いつも筆記が間に合わないのです。二〇一三年から、台北市樹林区にある慈濟俊英環境保全センターで早朝行われる「法の香りに浸る」朝会に参加するようになりました。行く前は、きつととても厳粛な道場なのだろうと思っていたのですが、行ってみると、花蓮の朝会でお話される證嚴法師と各地

の会場がインターネットで繋がっていて、まるで證嚴法師のすぐお側にいるような気持ちになりました。心優しい證嚴法師は、弟子がきちんと理解できるように、何度もお話を繰り返されるので、私も筆記に間に合うようになり、仏法が心の中にまで入ってきて、よく理解できるようになりました。

たくさんの仏教用語を学んで見聞を広めることができ、本当に役に立っています。仏教の教えである四諦、十二因縁、六度万行に自分の行いを照らして反省し、人としてなすべき本分を尽くすよう努めています。もしも心が無明に覆われていたなら、自分がどこから来たのか、どこへ行こうとしているのかも、そして自分の生きている価値さえも分からなかったと思います。「一つの灯が千年の暗闇を取り払い、一つの智慧が万年の愚を取り払う」というように、仏陀は智慧を用いて無知蒙昧な衆生を教え導き、人生をどのように送るべきかを示してくださいました。



法の香りに浸る

仏教を学ぶのは自分と人を濟度するためです。法身とは何でしょうか。もし私たちが時代に合わせて、仏陀の理念を応用して人々を教え導き、煩惱を菩提に転じ、誤った考えを正しい方向に導くことができるのなら、正法が常にこの世にあることでしょう。成仏する前に、人々とよい縁を結ばなければなりません。内に修め、外に行い、人々から信用され、喜ばれ、敬われるように努めなければなりません。さらに自分自身が努力を怠らず、自分の身も心も仏陀と同等のものになるよう努めることが、本当に仏教を学ぶということの意味です。

私は毎朝自転車を漕いで道場に行き、證嚴法師がお話してくださる《法華経》のお説教を拝聴し、その後一旦家に帰ってから仕事へ出かけます。この毎朝の習慣を、私は運動と見なしています。時には七時前に出社しなければならぬこともあります。そんな時は朝食の時間を削り、決して朝、法に浸る時間を犠牲にすることはありません。高齢の證嚴法

師が、せっかく弟子のために熱心に説教をしてくださっているのですから、そのお心遣いを無駄にすることはできません。

一昨年、私は自転車から落ちて転んでしまいましたが、幸い怪我のなかったことに感謝しました。また、職場で一緒に働いている外国人労働者との間に、言葉が通じないために、ちょっとした問題が起きました。心の中で無明が頭をもたげかけた時、まず心を落ち着けて考え方を変え、行き違いを解決しました。

人は誰しも百パーセント完璧ではありません。その人のよいところを見るようにして、お互い尊重し合うよう努めなければなりません。毎日必ず正法を学び、清らかな心で法の海を漂い、すべてをよい方向に考えなければなりません。生命の価値を活用すれば、毎日がもつと心軽やかに自在なものとなることができます。

(慈濟月刊六〇八期より)

銀髪の宝を抱きしめる

◎文・葉又華 撮影・黄筱哲 訳・本諦

お年寄りたちは環境保全ステーションで無償の奉仕をしています。
ボランティアたちは彼らに対し、
情熱と尊重、抱擁、ケアで迎え、
自分の親に対するように挨拶をします。
「おばあちゃん、今日はご機嫌いかがですか？」

朝七時過ぎ、謝素珍さんは双和環境保全ステーションに到着するとエプロンを着け、忙しい一日が始まりました。まず眼

鏡をかけて、物資の運搬経路の路線図を作成し、それから資源回収トラックの側に来て、その路線図を運転手ボランティア

アが確認します。彼女は積荷を縛ったロープがしっかりしているかどうか一本一本確かめてから、ドライバースーツをのぎ込み、「ちよつと待って」と言っ、ふり返ってヘルメットを取り、車内にいるボランティアにかぶせました。「被ったほうがすてきよ」と言われ、ボランティアは恥ずかしそうに微笑みました。彼女は軽く車のドアを閉め、微笑みながら手をふって、回収物を取りに行った資源回収トラックを見送りました。

五百坪あまりの環境保全ステーションでは、彼女があちこち走り回る姿が見られます。また、随時、電話で、双

和地区の各リサイクルセンターの回収物運搬に対する要望を聞くと共に、すでに分類されて搬出すべきものを把握しています。彼女は時々、異なった仕分け場所に行き、お年寄りが座っている椅子の隣にしゃがんで、「おばあさん、今日もよく来ましたね。ご機嫌いかがですか？」と訊きます。

彼女は軽く年長者の背中をなでたり、抱擁したりしました。数日前、八十歳になるボランティアが彼女に、「珍ちゃん、エプロンを一枚、作ってくれる？」と聞きました。おばあちゃんは自分が着けている色褪せた破れかけた古いエプロンを



見てから、恥ずかしげに彼女を見ました。
謝素珍さんは快くそれを承諾しました。
彼女はしばらく前に安く手に入ったスー
ツ生地を思い出しました。黒色だから汚
れが目立たなく、立派に見えるでしょう。
おばあちゃんの要望に応じて二つの大き
なポケットも縫いつけました。この日エ
プロンを持ってきましたが、おばあちゃ
んがいつも座っている椅子にはおばあち
やんの姿はまだ見えませんでした。

昼近くになって、九十一歳の王根枝さ
んは杖をつきながら、環境保全ステー
ションを出ようとしていました。「おば
あちゃん、お帰りですか？」と謝素珍さ

んは彼女を引き止め、難聴のおばあちゃ
んの耳元で言いながら、自分のエプロ
ンのポケットから何粒かの葡萄を取り出し
て、おばあちゃんの掌に載せました。

そよ風が王根枝さんの真つ白な銀髪を
なで、彼女は相変わらず静かで照れくさ
そうに微笑んでいました。息子さんのバ
イクの後部座席にゆっくりと腰かける
と、バイクは音を立てながら去ってい
きました。

私は謝素珍さんのエプロンの中にどう
して新鮮な葡萄が入っていたのか不思議
に思いました。それは、時々、ボランティ
アが皆に持つてくるもので、是非食べてほ

しいと言うので笑顔で受け取るのですが、
忙しいため、それをポケットに入れたまま
になり、時々ほかのボランティアにあげて
いるのです。厚い人情がエプロンのポケッ
トから溢れ出しているのです。

と思つたら、謝素珍さんは私のそばか
らいなくなり、近くにいたおばあちゃん
にエプロンをつけていました。おばあち
やんが一回転すると、エプロンの裾はふ
くらはぎを覆い、スタイルの良さにお婆
ちゃんは喜んで笑顔を見せました。

●大勢のお年寄りの前では、謝素珍さん（左から
3番目）はいつも笑顔を浮かべています。まるで
自分の親と一緒にいるようです。

人の世話をしてきた人生

謝素珍さんは双和リサイクルステーションの現場調整の担当者です。週に四日間はここで忙しく働き、そのほか一日は娘に代わって孫の世話をしています。

十四年前に事業を手放し、ボランティアに全力で投入するようになる前、謝素珍さんはテラーでした。彼女は子供のときに両親と一緒に嘉義から台北に出てきて、その後中和市にある紡績工場に就職しました。手に職がついた後、彼女は四、五人雇って、テラー店を始め、二人の娘を歯科医と投資顧問

に育てあげました。

末っ子の息子は早産だったため、重度の知的障害がありました。ある日、知的障害者施設を訪問したとき、一人の先生が八人の障害者の面倒を同時に見ているのを目にしました。一人の障害者に靴紐の結び方を教えている時、ほかの七人はただぼーっとしていました。謝素珍さんは涙を流しながら施設を後にしましたが、テラー店を閉め、息子の教育に専念する決心をしました。

息子さんが障害者特殊学校を卒業した後、謝素珍さんは毎日彼を連れて山登りをしたり、家事を教えたりしました。源回収トラックに乗り、回収物を運ぶまですになったのです。

仕事に出かけられるのは 平穏な証拠

息子には四、五十人の先生を持つことになり、と考えました。

「息子が私を環境保全ステーションに導いてくれたのです」。彼女は四十八歳のときに息子さんと環境保全の仕事を始めました。最初は息子が見知らぬ環境を怖がり、人とコミュニケーションをうまく取れないのではないかと心配しましたが、今では彼女の目の届かない所で、資

謝素珍さんは偶然、自分のバイクの上に新鮮な野菜が一袋ぶらさがっていることに気づきました。その小さなプレゼントに彼女は思わず微笑みました。

七十八歳の劉新金さんは、午前中自宅の近くにある畑で忙しく働いた後、午後一時過ぎにリサイクルステーションにやってきて、道具がいっぱい載った作業台

の前に座り、打ったり叩いたりし始めました。

劉新金さんは元々実家のある彰化で農家をしていました。十数年前、妻に先立たれてから、息子さんが一人暮らしの父を心配し、台北で一緒に住むよう勧めました。家の近くにちようど畑があったため、お年寄りはいいつも通りに畑仕事をし、庭には季節ごとの色鮮やかな野菜を植えています。

農作業を終えた午後、劉新金さんは付近の公園へ運動に出かけます。何人かの年が近い友達と知り合いますが、内向的で、人付き合いが苦手な劉新金さんは、

挨拶するだけです。三年ほど前、家族が慈済の環境保全ステーションへ行くよう励ましてから、彼が毎日決まって行く場所となりました。

しかしその劉新金さんが五日間続けて欠席しました。謝素珍さんは気になって、バイクで彼の家を訪ねました。息子さんは、野菜畑の仕事に忙しく、環境保全ステーションに行くのを忘れたのではないかと笑って答えました。思いもよらず、その翌日、謝素珍さんはバスの中で劉新金さんと偶然に会いました。病院へ長期処方薬をもらいに行くところでした。

(つづく)

慈済大事記三月

.....

訳・済運

03・01	花蓮慈濟病院はスマートフォンアプリで診療代を支払う方式を導入した。来院者は自分や家族の医療費の支払いを済ますことができ、順番待ちする必要がなくなった。また、お年寄りに代わって支払いをする人は彼らの診察記録をみることもできるようになった。
03・02	台北慈濟病院は本日より目の不自由な人を対象にした「第61回3級マッサージ養成講座」を設け、参加者は衛生教育、健診及び実習の機

03・10	<p>◎慈済科技大学は「運動式安全注射針」、「体感できる傷口模型」で中華民国看護師協会全国懇親会の「看護アイデア賞」で秀作と佳作賞を獲得した。</p> <p>◎慈済基金会はセルビア難民委員会の世界各国からの難民に対するケアへの感謝として、600枚の着脱式ジャケットを委員会の職員全員に寄贈した。ジャケットは大愛感恩科技公司の製品で、1枚につき76本の回収ペットボトルが使用されており、表には委員会のマークが印刷されている。</p> <p>◎花蓮県認知症合同ケアセンターと花蓮県衛生局、花蓮慈済病院は本日より合同で12週間連続して「花蓮県心身機能向上及び脳の活性化」方案で老化に対抗する活動の指導員と助手の養成講座を開き、100人が参加する。参加者は養成講座を終えた後、当県の50の地点で「長期ケア2・0認知症の予防と遅延」活動を展開する。</p>
-------	---

03・04	<p>◎アルゼンチンの慈済ボランティアは学校が始まる前日、ブエノスアイレス州キルメス市ルホー地区で113人の貧困家庭の学童に文具を届けた。</p> <p>◎オーストラリア、シドニー、メルボルン、ゴールドコースト及びパースの慈済ボランティア延べ288人が全国清掃の日活動で地域の清掃に参加した。</p>	03・03	<p>チリの慈済ボランティアは学校が始まる前日、サンベルナルド市の「文化の家」を訪れ、88人の貧困家庭の子供たちにスケッチブックとノート、筆記具一揃えなどの文具を届けた。</p>	会 が 得 ら れ る。
-------	--	-------	---	-----------------------------

03・21	台北慈濟病院は新北市政府から癌健診の優良病院として表彰された。
03・20	アメリカ・アンドリュー大学商学部の紀良岳副学部長が慈済大学と交流した結果、共通の認識を持つに至った。慈済大学公共衛生学部修士課程大学院はアンドリュー大学MBA修士課程大学院と協力する。
03・17	台湾、ベトナム、カンボジア、シンガポール、マレーシアの慈済ボランティアは慈済人医会と共に17日と18日の2日、カンボジアのヤン省のカンポントラチ病院で施療を行い、延べ3486人を診察した。
	明が覚え書きにサインした。

03・12	慈済基金会は12日から23日まで「第62回国連女性地位委員会」に参加する。中でも13日に「気候変動を抑える活動に辺地の女性が担う役割を増やす」と題した会議に参加し、他の人権団体やNGOと交流をする。また、21日から23日にはサミット会議に招かれ、各国の代表報告を聞いたり、チーム別討論に参加する。
03・14	◎花蓮慈済病院の心臓外科はアメリカ・デューク大学医学センター成人心臓手術センターと覚え書きを交わし、医学センターのミラノ主任医師ら3人を慈済病院の榮譽顧問に任命した。 ◎慈済基金会マレーシア支部は現地政府と協力覚え書きを交わし、サバ州ケニンガウ病院の腎透析センターと協力することを決めた。 慈済セラングール支部長の簡淑霞とマレーシア衛生部秘書長の陳超

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002
花蓮慈济医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈济病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈济病院
956 台東県関山镇和平路 125-5
号
TEL: 886-89-814880
大林慈济病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈济病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈济病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88
号
TEL: 886-4-36060666
FAX: 886-4-36021123
慈济大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301
FAX: 886-3-8563604
台北支部
106 台北市忠孝東路三段 217 巷
7 弄 35 号
TEL: 886-2-27760111
FAX: 886-2-27761244
慈济人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大爱テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ
総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885
カナダ
TEL: 1-604-2667699
メキシコ
TEL: 1-760-7688998
ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972
ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091
イギリス
TEL: 44-20-88699864
フランス
TEL: 33-1-45860312
ドイツ Hamburg
TEL: 49(40)388439
オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511
スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883
オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988
南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365
中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

香港
TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3
ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001
ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494
マレーシア
Penang
TEL: 604-2281013
Malaka
TEL: 606-2810818
シンガポール
TEL: 65-65829958
インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大爱テレビ局
TEL: 62-21-50558889
スリランカ Hambantota
TEL: 94(0)472256422
ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305
トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802
オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666
ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈濟

2018年4月18日発行・256号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴
発行所 慈济基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路2号
編集 慈济日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・王麗雪
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈济基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)



最高の笑顔

台湾を旅行中のカナダ人のボブさんは、花蓮地震が発生した直後、被災地に駆けつけてボランティアに参加した。避難所となっていた中華小学校にある慈済ステーションで、リサイクルに協力した。「観光で来た台湾でしたが、今は誰かの役に立つことの方がより大事だと思ったのです」と語った。ボブさんの行動は被災地で最も美しい人情に溢れた光景となった。



慈濟ものがたり